下本谷遺跡第5次発掘調査概報

１９８４

広島県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、昭和58年７月18日～８月12日にかけて実施した三次市西酒屋町の下本谷遺跡の第５次発掘調査概報である。

2　発掘調査は広島県教育委員会が得た昭和58年度国庫補助金をもって広島県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は植田千佳穂・伊藤実・片山和哉が、整理・報告書作成は植田が担当し、写真撮影は植田が実施した。

4　本書の執筆・編集は植田が行った。

5　トレンチの番号は４桁で、そのうち上２桁が調査年度の西暦の下２桁を、下２桁が一連番号を用いており、最後にＴを付している。遺構の記号はＳＢ：住居跡・建物跡、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝である。

6　遺物の断面は土師器：白、須恵器：黒で表現した。

7　本文では、便宜上調査区を５区に分けた。

第１調査区　8301・8302・8306・8315Ｔ

第２調査区　8305Ｔ

第３調査区　8308・8313Ｔ

第４調査区　8309～8312・8314Ｔ

第５調査区　8303・8304・8307Ｔ

8　第１図は、建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図（三次）を使用したものである。

9　本概報に使用した方位はすべて磁北である。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… (1)
Ⅱ　位置と環境 …… (2)
Ⅲ　調査の概要 …… (3)
Ⅳ　遺　構 …… (4)
Ⅴ　遺　物 …… (10)
Ⅵ　まとめ …… (15)

図 版 目 次

図版１　ａ．下本谷遺跡遠景（南西より）
　　ｂ．8301Ｔ－ＳＢ１・２，ＳＫ５（西より）
図版２　ａ．8303Ｔ－ＳＢ１（西より）
　　ｂ．8303Ｔ－ＳＢ２（西より）
図版３　ａ．8305Ｔ－ＳＢ１（北より）
　　ｂ．8311Ｔ－ＳＤ１（南東より）
図版４　ａ．8314Ｔ－ＳＤ１（南東より）
　　ｂ．8315Ｔ東壁断面（西より）
図版５　出土遺物（１）
図版６　出土遺物（２）

挿 図 目 次

第１図　下本谷遺跡位置図（１：50,000）……（２）
第２図　8301Ｔ実測図（１：60）……（４）
第３図　8302Ｔ実測図（１：60）……（５）
第４図　8303Ｔ実測図（１：60）……（６）
第５図　8305Ｔ実測図（１：60）……（８）
第６図　8311・8314Ｔ実測図（１：80）……（９）
第７図　8315Ｔ土層断面図（１：60）……（９）
第８図　出土遺物実測図（１）（１：３）……（11）
第９図　出土遺物実測図（２）（１：３）……（12）
第10図　出土遺物実測図（３）（１：３）……（12）
第11図　出土遺物実測図（４）（１：２）……（13）
第12図　出土遺物実測図（５）（２：３）……（14）

付 図 目 次

付図　下本谷遺跡トレンチ配置図（１：2,000）

Ⅰ はじめに

下本谷遺跡は、昭和49年12月県道三次世羅西線道路特殊改良工事中に発見され、昭和50年3月から5月にかけて実施した調査の結果、規格性のある建物跡群、柵列や出土遺物により、奈良時代後半～平安時代初期にかけての古代官衙跡（三次郡衙跡）に推定された。この道路部分については、残念ながら調査後消滅してしまった。その後、昭和53年5月から6月にかけて、三次市西酒屋町配水池及び送水管の建設に伴って実施した調査の結果、官衙跡と関連する建物跡のほか、旧石器時代の石器が検出でき、遺跡が広範囲に存在するとともに、時代的にも長期間にわたって形成されたことが判明した。

しかし、中国縦貫自動車道の開通以後、開発が急ピッチに進み、三次インターチェンジに隣接する本遺跡も次第に開発の波が押しよせようとしているが、遺跡の内容や範囲は充分に解明しておらず、広島県教育委員会は早急に遺跡の範囲を確認し保存対策を講ずる為、年次的に発掘調査を実施することにした。昭和54年に調査を開始し、本年が第5次発掘調査となる。なお、昭和56年には、本遺跡の庁院部西端について県史跡に指定した。

第5次発掘調査は、昭和58年4月1日に設立した広島県立埋蔵文化財センターが担当し、7月18日～8月12日及び3月5日～9日に総経費300万円（国庫補助金150万円）をもって実施した。

調査期間中の8月4日には、広島県文化財保護審議会下本谷遺跡調査特別部会が開催されるなど、本遺跡の調査に当たっては特別部会の諸先生方の指導と助言を得た。また、広島大学理学部柴田喜太郎氏より指導・助言を、三次市教育委員会、可部高等学校教諭杉田浩之氏、可部高等学校史学研究部、山田繁樹氏、妹尾周三氏、佐々木美和氏及び西酒屋、東酒屋、高杉の各地域の方々から多大な御協力をいただいた。また、土地所有者の大畠巧、表一郎、金居博登、国貞精三、重中誠三、正町清司、福長晃次、福永順二の各氏から快く発掘承諾をいただいた。あわせてここに厚く謝意を表する次第である。

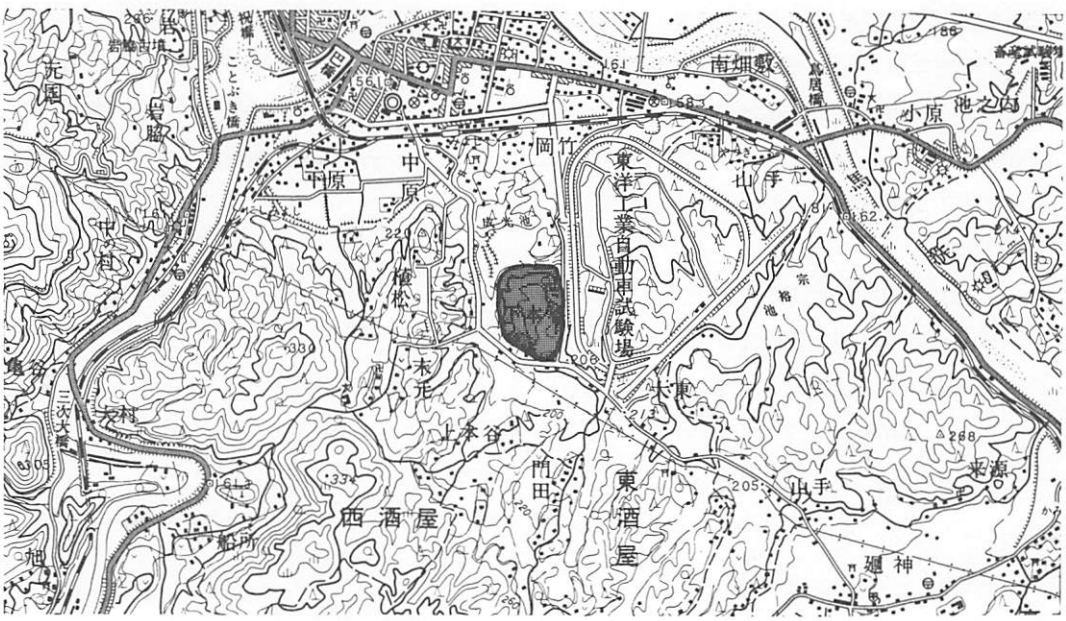
広島県文化財保護審議会
（下本谷遺跡調査特別部会）

部会長	松崎　寿和	広島大学名誉教授	（考古学）
副部会長	河合　正治	広島大学名誉教授	（歴史学）
	潮見　浩	広島大学教授	（考古学）
	鈴木　充	広島大学教授	（建築学）
	藤原　健蔵	広島大学教授	（地理学）
	村上　正名	福山市立女子短期大学教授	（考古学）

Ⅱ　位置と環境

下本谷遺跡は三次市西酒屋町善法寺にあり、三次市街地から南に広がる緩やかな低丘陵上（標高205～225ｍ）に立地している。三次盆地は県北最大の盆地であり、古くから山陽と山陰を結ぶ交通の要衝となっている。また、県内最大の遺跡の密集地帯として知られており、周囲の丘陵にも、北方には日光寺遺跡・花園遺跡・若宮古墳、西方には高平遺跡・酒屋高塚古墳、東方には松ケ迫遺跡群、宗祐池西遺跡など著名な遺跡が多く点在している。

以下、三次盆地の主な遺跡について概略を述べる。旧石器時代には本遺跡をはじめ、松ケ迫Ａ地点遺跡・下山遺跡から旧石器が出土している。縄文時代では遺跡の確認された例が少なく、松ケ迫Ｂ地点遺跡から縄文早期の住居跡がみつかっている程度である。弥生時代には、集落跡の調査例として塩町遺跡・高平遺跡・高蜂遺跡などがあり、竪穴式住居跡などが検出されている。また、弥生～古墳時代の墓制の変遷を解明する上で貴重な遺跡の調査も行われている。例えば、花園遺跡・宗祐池西遺跡・矢谷古墳・岩脇古墳である。特に、矢谷古墳は四隅突出型前方後方形墓という特殊な形態であり、その内容とともに墓制の変遷や地域性を考える上で貴重な資料である。古墳時代になると多数の古墳また古墳群が確認され、中でも糸井塚ノ本第１号古墳（糸井大塚古墳）を始め、酒屋高塚古墳・若宮古墳・善法寺古墳群・浄楽寺古墳群・七ッ塚古墳群などは著名である。また、集落跡として松ケ迫遺跡群より丘陵斜面に構築された数多くの竪穴式住居跡などが検出されている。奈良時代以降の遺跡として、三次郡衙跡と推定される本遺跡や、寺戸廃寺跡・寺町廃寺跡・上山手廃寺跡などがある。



第１図　下本谷遺跡位置図（１：50,000）

Ⅲ　調査の概要

第５次調査は第４次調査までの成果を踏まえ、遺跡の範囲と内容を解明する為、丘陵北半周辺を中心に調査を実施した。実際には丘陵頂部南半及び丘陵頂部から東、北東、北西、西に各々派生した支脈の尾根上及び斜面にトレンチを入れた。また、旧石器の土層の剝取りを実施する為、墓地の北側にもトレンチを入れた。

便宜上、ここでは５つの調査区（第１～５調査区）に分けて論述する。第1調査区：8301・8302Ｔ（西酒屋町善法寺108），8306Ｔ（同105－３），8315Ｔ（同138）墓地より南約100ｍのところへ8301・8302Ｔを、配水池から南へ約110ｍのところへ8306Ｔを設定した。いずれも東西トレンチである。また、墓地の北側に8315Ｔを設定した。8301Ｔから竪穴式住居跡２、土坑１、溝２を検出し、須恵器（杯身・甕）、土師器（皿・甕）が出土した。また、それに近接した8302Ｔ西半から溝１を検出し、同トレンチから須恵器（杯蓋・杯身・高杯）、土師器（皿・甕）、寛永通宝１点が出土した。また8315Ｔは深さ約1.9ｍ掘下げた結果、須恵器（杯身）、石核が出土した。第２調査区：8305Ｔ（西酒屋町善法寺59－１）丘陵東半中央で丘陵頂部から尾根が東に延びた後、北東～北へ向きを変えているが、8305Ｔは尾根筋に沿って北東～南西方向に設定した。その結果、竪穴式住居跡１、土坑１などを検出し、須恵器（甕）、土師器（甕）などが出土した。第３調査区：8308・8313Ｔ（西酒屋町善法寺140―１）丘陵最頂部から、北ないし北東に延びる丘陵尾根筋に沿って、8308・8313Ｔを設定したが、8308Ｔより須恵器（杯身・甕）が出土したのみである。第４調査区：8309～8311・8314Ｔ（西酒屋町善法寺130－１）、8312Ｔ（同120―１・124－２）丘陵最頂部から北西に延びる尾根に沿い、8309～8311・8314Ｔを設定した。また、配水池付近から北西に延びる尾根上にＬ字形に8312Ｔを設定した。8309Ｔより弥生土器（壺）を、8311・8314Ｔより溝を検出した。なお、8314Ｔから南へ約25ｍのところへ古墳と思われる墳丘があり、そこより須恵器が出土している。第５調査区：8303Ｔ（西酒屋町善法寺109）、8304・8307Ｔ（同116）丘陵西半で、丘陵頂部から西へ派生した尾根筋及び斜面に8303・8304・8307Ｔを設定したところ、8303Ｔより竪穴式住居跡２、土坑３を検出し、円面硯をはじめとする須恵器（杯身・杯蓋・鉢・長頸壺・甕）、土師器（甕・甑）、砥石、鉄滓などが出土した。以上のほか8302・8304・8306・8311・8312・8314Ｔより礫群を検出したが、人工的な遺構とは判断できなかった。

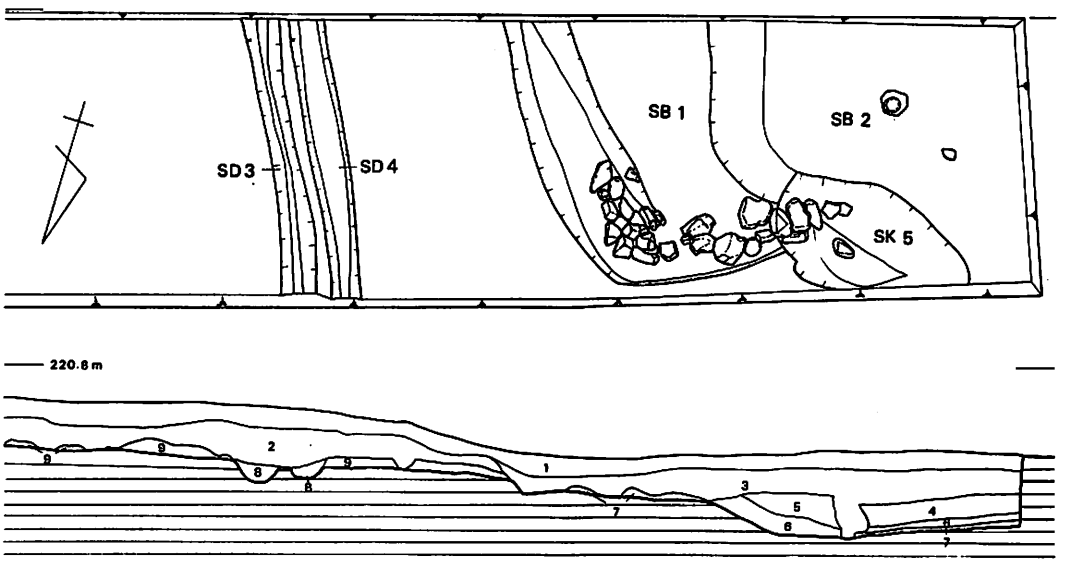
Ⅳ 遺　　構

第５次調査によって遺構を明確に検出した8301～8303・8305・8311・8314Ｔ及び旧石器の出土した8315Ｔについて、以下順次述べる。

8301Ｔ（第２図、図版１ｂ）

ＳＢ１

8301Ｔの西半に位置し、ＳＢ２・ＳＫ５と重複する竪穴式住居跡である。東から西へやや傾斜したゆるやかな斜面に立地している。トレンチ調査のため、南半部や西半部がトレンチ外であるため住居跡の全容は明らかでないが、平面プランは現状では北西をコーナーとするＬ字形を呈している。西半のＳＢ２、ＳＫ５上には盛土貼床を行っている。主軸方位はＮ29°Ｗで、規模は現状で南北2.40ｍ、東西3.84ｍ、壁高0.26ｍを測る。床面は平坦で、東辺には幅広の壁溝が掘られており、幅0.70ｍ、深さ0.05ｍである。北西コーナーから北辺にかけて20～30㎝程度の角礫が集積している。人為的に置かれているが、カマド等とは思われず、性格は不明である。埋土は褐色土で、土師器の甕（第10図16）・皿（第10図17）などが少量出土した。ＳＢ２・ＳＫ５とＳＢ１の新旧関係はＳＢ２・ＳＫ5→ＳＢ１である。



第２図　8301Ｔ実測図（１：60）

ＳＢ２

8301Ｔの西端に位置し、ＳＢ１、ＳＫ５と重複する竪穴式住居跡である。南半部と西半部がトレンチ外であるが、平面プランはＳＢ１同様、北西をコーナーとするＬ字形を呈しており、北辺はＳＫ５と重複し、不明である。主軸方位はＮ17°Ｗで、規模は現状で南北1.44ｍ、東西2.44ｍ、壁高0.36ｍを測る。壁溝・柱穴は検出できなかった。埋土は、褐色土、黄褐色土、黒色土である。床面より須恵器の長頸壺（第８図９）・甕（第８図10）などが出土した。ＳＢ１との新旧関係は、土層よりＳＢ２→ＳＢ１であるが、ＳＢ５との関係は不明である。

ＳＤ３・４

8301Ｔの中央に並んで位置する溝である。両者とも断面は台形で、ほぼ平行し直線的でトレンチ外の南北に延びており、方向はＮ15°Ｗである。規模は両者とも現状では0.22～0.30ｍ、深さ0.20ｍ、長さ2.20ｍを測る。埋土は灰黄色土である。

ＳＫ５

8301Ｔの西半に位置し、ＳＢ１・２と重複する土坑である。北半部分がトレンチ外にあるが平面プランは長楕円形で、主軸方位はＮ73°Ｗである。規模は現状では南北0.96ｍ、東西1.62ｍ、深さ0.40ｍを測る。埋土は、黄褐色土・暗褐色土・黒色土である。

8302Ｔ（第３図）

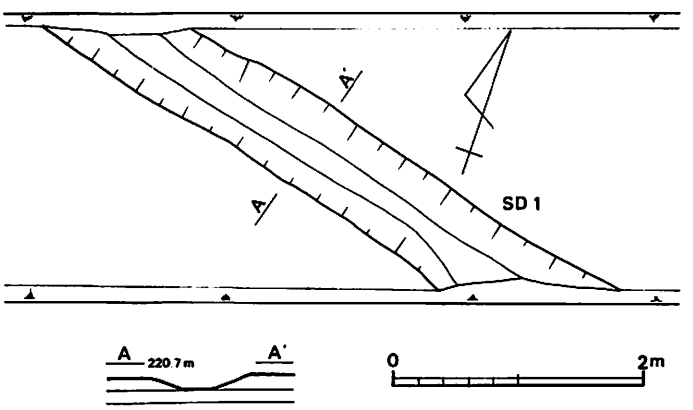
ＳＤ１

8302Ｔの西半に位置する溝である。丘陵頂部でわずかに南北に延びた尾根筋に立地している。方向はＮ75°Ｗで、8301ＴＳＤ３・４の溝とは方位を異にする。規模は、現状では幅0.60～0.70ｍ、深さ0.10ｍ、長さ約４ｍでトレンチ外の東西へ延びている。埋土は黒色土である。

8303Ｔ（第４図、図版２）

ＳＢ１

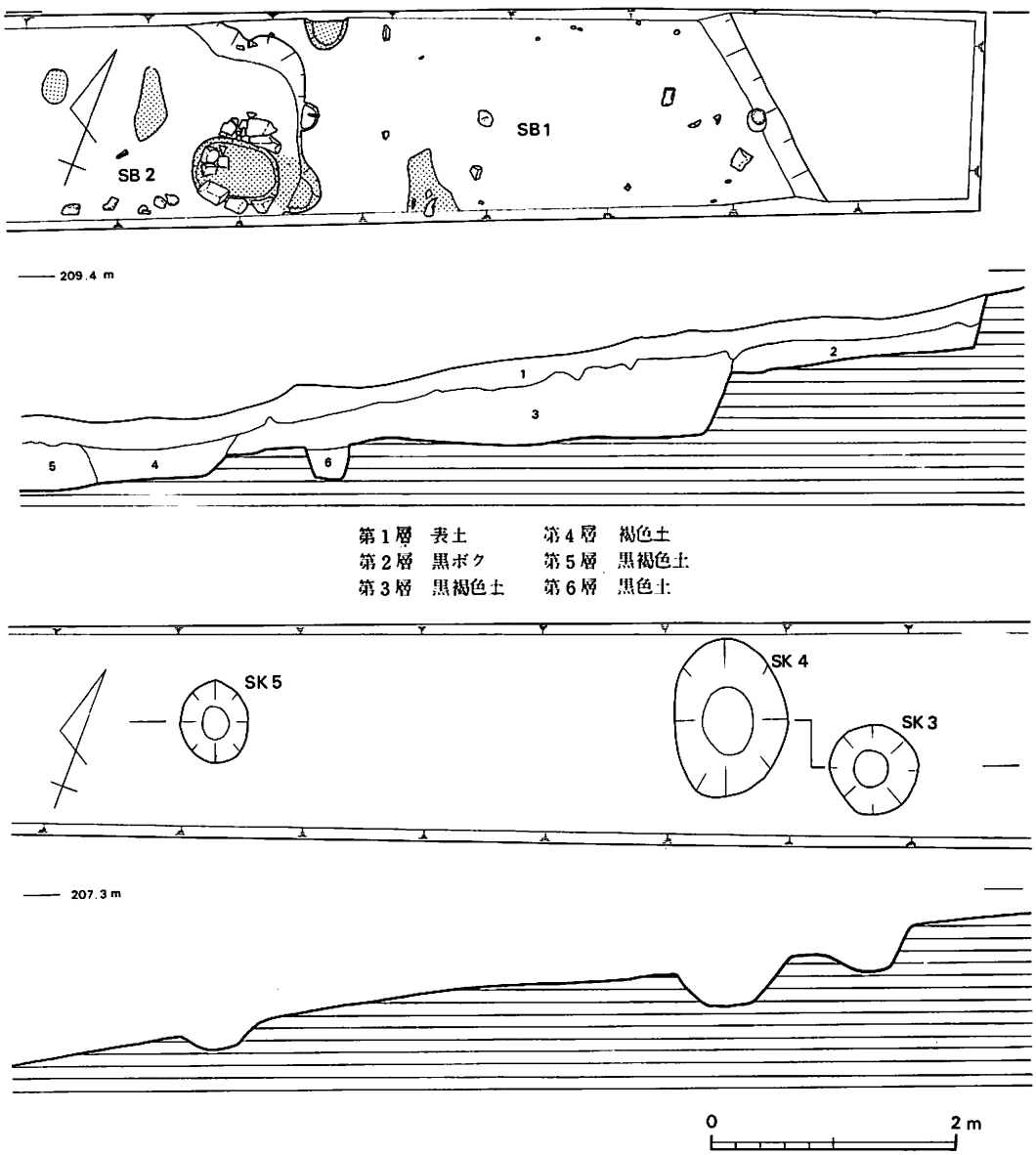
8303Ｔの東半に位置し、ＳＢ２と重複する竪穴式住居跡である。丘陵頂部より西方に派生した丘陵尾根筋で10°前後に傾斜する斜面に立地している。平面プランは、トレンチ調査のため、現状では斜面上方を削平した段のみである



第３図　8302Ｔ実測図（１：60）

が、他の住居跡同様、コの字形を呈しているものと思われ、北半部と南半部はトレンチ外である。主軸方位はN49°Wで、規模は現状では南北8.70m、東西4.04m、壁高0.55mを測る。壁は80°前後に掘凹めた、かなりしっかりした住居跡である。焼土を埋土中層より検出した。

壁溝はなく、柱穴1があるのみで、住居構造は明らかにできなかった。埋土は黒褐色土で、ほぼ床面より須恵器の杯蓋（第8図1）・杯身（第8図7）・長頸壺（第8図8）・甕（第8図11）・円面硯（第9図14）など多数が出土した。ＳＢ２との新旧関係はＳＢ１→ＳＢ２である。



第4図　8303T実測図（1：60）（アミメは焼土）

ＳＢ２

8303Ｔの東半に位置し、ＳＢ１と重複する竪穴式住居跡である。ＳＢ１同様、斜面に立地している。平面プランはトレンチ調査のため現状では北東をコーナーとするＬ字形であるが、北辺がやや凸凹しており、トレンチ外の南側に広がるものと思われる。主軸方位はＮ21°Ｗで、規模は現状では南北1.58ｍ、東西2.20ｍ、壁高0.20ｍを測る。柱穴や壁溝は検出できなかったが、造付けのカマドが東辺の北東コーナーより南へ約１ｍのところに存在する。幅0.80ｍ、長さ0.90ｍで、袖部は20～30cm程度の角礫を３～５個ずつ平行に置き、その間に、更に小さな礫を詰め、茶褐色土で取巻いていたようである。焚口から燃焼部にかけては、浅い土坑状に掘凹めており、そのプランは楕円形で0.60×0.72ｍ、深さ0.10ｍを測り、炭や焼土を含む茶褐色土や淡黄褐色土が堆積している。また、焚口付近には小礫が数個落込んでいた。煙道はトンネル式でなく、住居跡より約0.2ｍ東に掘拡げられているだけであり、石・板等を用いて煙道とした可能性がある。8305ＴのＳＢ１のカマドでも、煙道がトンネル式でない点は共通する特徴と思われる。その他、焼土がカマドより西側に２カ所あった。埋土は褐色土・黒褐色土で、須恵器杯蓋（第８図２）・杯身（第８図４）・鉢（第８図13）・円面硯（第９図15）、砥石（第11図19・20）、鉄滓などが多数出土した。円面硯は脚部の破片で、カマドより西側０.８ｍの床面より出土した。

ＳＫ３

8303Ｔの中央に、ＳＫ４と並んで位置する土坑である。斜面に立地しており、平面プランは円形で、規模は径0.73ｍを測る。

ＳＫ４

8303Ｔの中央に、ＳＫ３と並んで位置する土坑である。斜面に立地しており、平面プランは長楕円形で、主軸方位はＮ20°Ｗである。規模は、南北1.28ｍ、東西0.92ｍ、深さ0.40ｍを測り、壁は45°前後に掘凹められている。

ＳＫ５

8303Ｔの西半に位置する土坑である。斜面に立地しており、平面プランは楕円形で、主軸方位はＮ20°Ｗである。規模は、南北0.67ｍ、東西0.56ｍ、深さ0.20ｍを測る。

8305Ｔ（第５図、図版３ａ）

ＳＢ１

8305Ｔの西端に位置する竪穴式住居跡である。南西から北東へ派生した丘陵尾根のやや南東斜面側にかかる傾斜変換点に立地する。現状ではＬ字形のプランであるが、本来はコの字形のプランであると思われ、南半部がトレンチ外にある。主軸方位はＮ84°Ｗで、規模は現状では

南北1.88m、東西3.18m、壁高0.25mである。北西コーナーから北辺にかけて、浅い溝を壁よりやや内側から検出し、幅0.24m、深さ0.05mである。柱穴は西辺近くに1個検出した。埋土は黒褐色土、黒灰色土である。カマドが北辺の北西コーナーから約1.8mのところに存在した。幅0.60m、長さ0.50mで、袖部は20cm前後の石を2～4個ずつ置き、茶褐色土を巻きつけており、焚口には細長い石が横方向に一個落込んでいた。燃焼部には、焼土を含む茶褐色土・淡茶褐色土などが堆積していた。煙道の痕跡は確認できなかった。須恵器の甕、土師器の甕の破片が出土している。

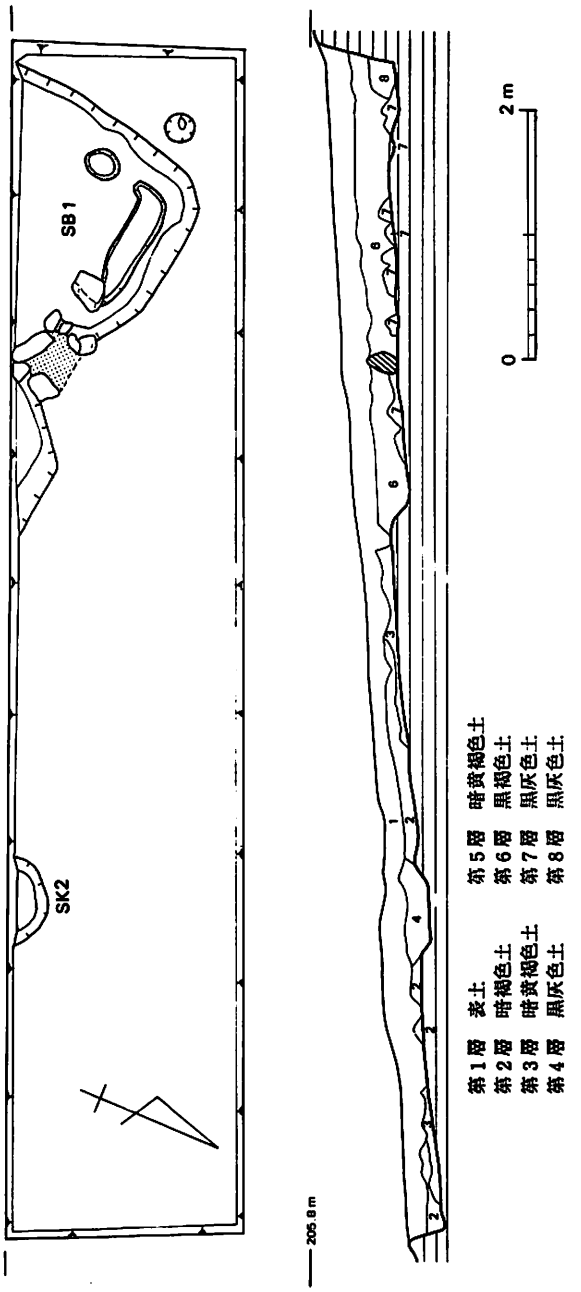
ＳＫ２

8305Ｔの東半でＳＢ１より東へ約2.6mのところに位置する土坑で、トレンチの南壁外に広がっており、現状では半円形である。規模は径0.70m、深さ0.10mで、埋土は黒灰色土である。

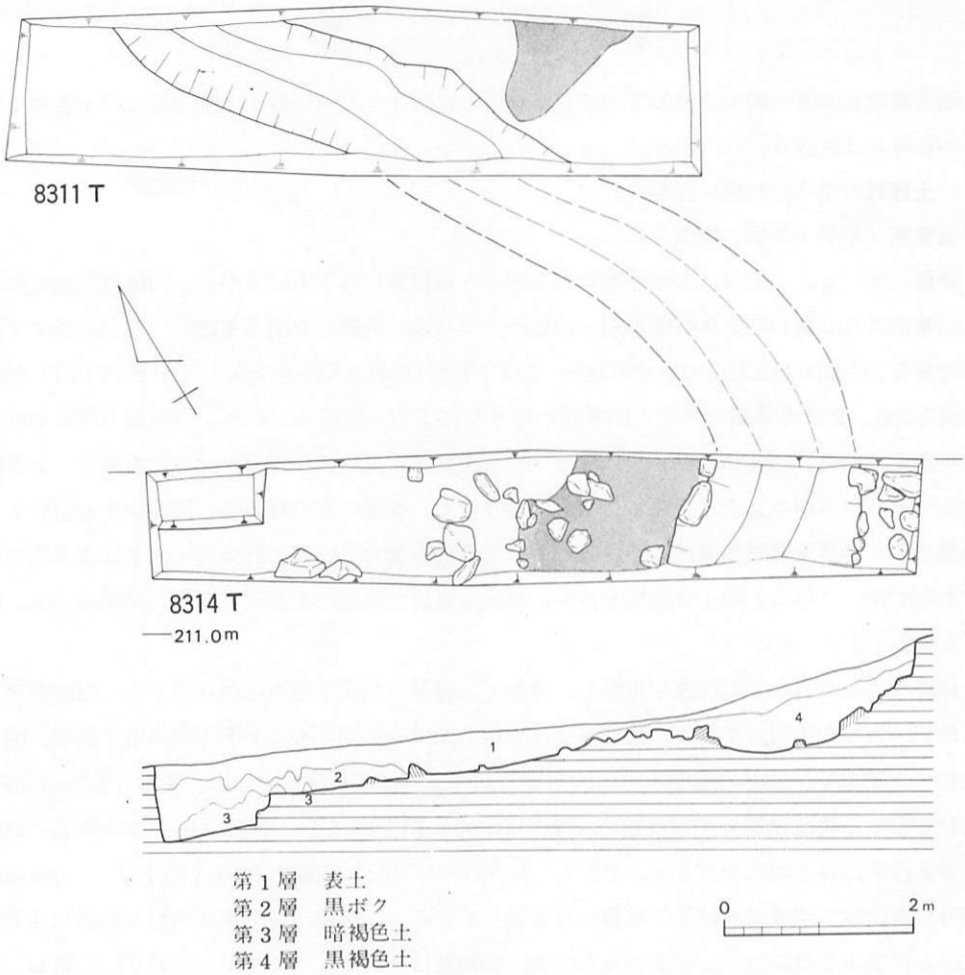
8311・8314Ｔ（第6図、図版3ｂ・4ａ）

ＳＤ１

8311・8314Ｔの両方で検出したもので、ほぼ弧状にめぐる溝と思われ、8311Ｔ付近ではやや直線的で、8314Ｔ付近で大きく曲がっている。溝の断面は台形で、規模は現状では幅1.15～1.90m、深さ0.70m、長さ8.00mで北半部及南半部に延びている。埋土は黒褐色土である。溝の東西には礫群が存在するが、自然的なものと思われる。遺物は出土してい



第5図　8305Ｔ実測図（1：60）
（アミメは焼土）

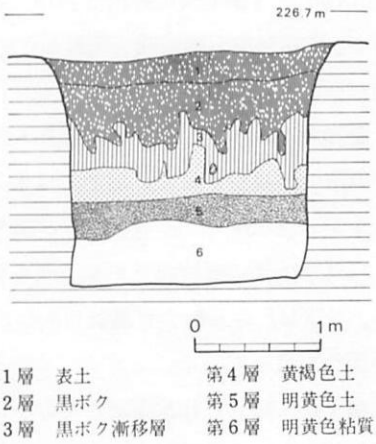


第６図　8311・8314Ｔ実測図（１：80）（アミメは礫群）

ないが、周辺のトレンチや表採した土器の中に弥生土器や古墳時代の須恵器があり、これらの時期の遺構になる可能性がある。

8315Ｔ（第７図、図版４ｂ）

旧石器時代の包含層の土層剝取りを目的として、8205Ｔと8206Ｔの間に本トレンチを設定した。基本的な層序は、昨年度調査と同様に、表土・黒ボク・黒ボク漸移層・黄褐色土・明黄色土・明黄色粘質土である。黒ボク漸移層より水晶製の石核１点が出土している。



第７図　8315Ｔ土層断面図（１：60）

V 遺　　物

出土遺物は8301～8303・8305Tの住居跡を中心に出土した須恵器・土師器などの土器類・鉄滓・石器などがある。

(1) **土器類**（第８～10図、図版５）

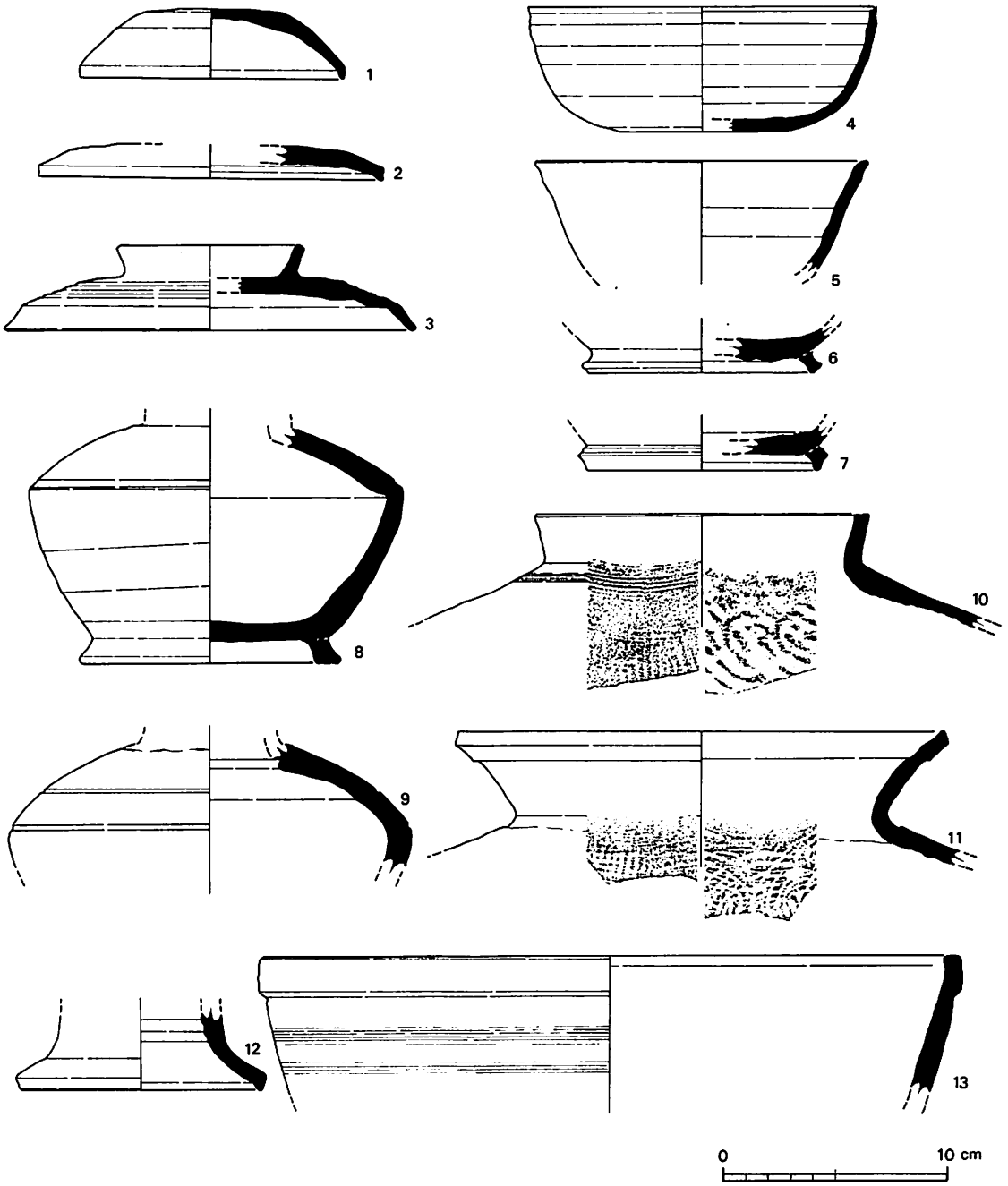
須恵器（第８・９図、図版５）

杯蓋（１～３）　１は、ほぼ平坦な天井部から直線的に外下方に下がり、口縁部は短く直下し、端部は丸く終わる。天井部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りを施し、他は回転ナデ調整である。胎土は１㎜前後の砂粒を含み、焼成は良好、堅緻で暗灰色を呈している。口径11.6㎝、器高3.1㎝。２は天井部が平坦で口縁部がわずかに下方へ肥厚している。口縁部内外とも回転ナデ調整である。口径15.2㎝。３はほぼ平坦な天井部に環状のつまみが付いたもので、天井部から外下方に下がり、やや屈曲し、口縁部は外反し、端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデ調整で、その後天井部内面のみ不定方向のナデ調整を施している。外面の一部には漆黒色の自然釉が付着している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で暗灰色を呈している。口径18.0㎝、器高3.9㎝。

杯身（４～７）　４は底部が平坦で、体部・口縁部は丸味を持ちながら立上り、口縁端部は内傾し中央がやや凹んでいる。底部外面は不定方向のヘラ削り後、不定方向のナデ調整、他は回転ナデ調整で、底部内面のみその後不定方向のナデ調整を施している。胎土は0.5㎜前後の砂粒を含み、焼成は良好で、灰白色を呈している。口径15.6㎝、器高5.6㎝。５は体部・口縁部が直線的に外方向に延びるものである。内外面とも回転ナデ調整である。胎土は１～２㎜前後の砂粒を含み、焼成は良好で、暗青灰色を呈している。口径14.6㎝。６は平坦な底部に外下方にふんばる小さな高台がついているもので、脚端部は下端と外方に向かってわずかに肥厚している。底部は回転ナデ調整後、内面が一定方向のナデ調整、外面が不定方向のナデ調整である。胎土は１～３㎜前後の砂粒を含み、焼成は良好で灰色を呈している。７は６と同様な杯身であるが、脚端部を下端に強く肥厚したものである。胎土は１㎜前後の砂粒を含み、焼成は良好で、淡黄灰色を呈している。

長頸壺（８・９）　８は口縁部～頸部を欠失したもので、体部は肩が張り、底部は平坦で広がり気味の高台が付く。肩部には１条の沈線が入る。底部外面は回転削り後ナデ調整、体部外面下半は回転削り、他は回転ナデ調整である。肩部外面には暗黄色の自然釉が付着している。９は体部上半の破片で、やや丸味を持っており、外面には間隔を置いて２条の沈線が入っている。内外面とも回転ナデ調整である。胎土は１㎜前後の砂粒を含み、焼成は甘く、暗黄灰色ないし黒色を呈している。

甕（10・11）　10は頸部がくの字に屈曲し、口縁部が直立気味に外反し、口縁端面が上方を向き、中央がやや凹んでいる。口縁部は回転ナデ調整、体部外面は平行タタキ後上半にカキ目、



第８図　出土遺物実測図（１）（１：３）

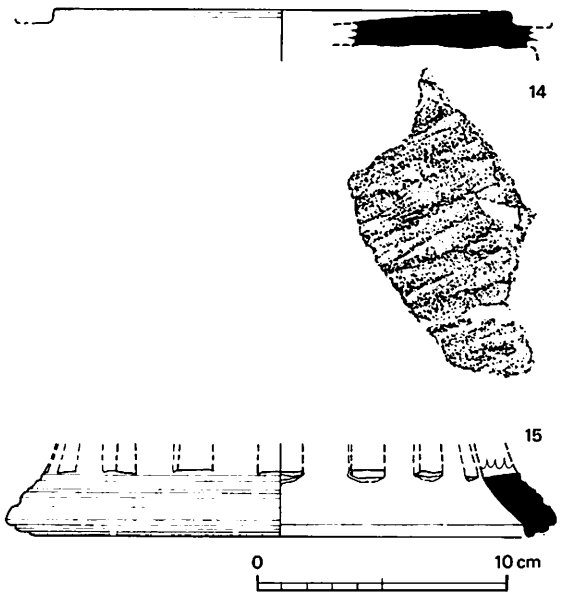
(8301Ｔ－ＳＢ２：９・10、8301Ｔ：６、8302Ｔ：12、
8303Ｔ－ＳＢ１：１・７・８・11、8303Ｔ－ＳＢ２：２・４・13
8306Ｔ－３、8315Ｔ－５)

内面は同心円タタキ後回転ナデ調整である。体部外面は、黄緑色の自然釉が付着している。11は頸部が強く、くの字に屈曲し、口縁部は大きく外反し、口縁端部は折曲げて外方を断面台形に拡張している。口縁部は内外面とも回転ナデ調整、体部外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキが施されている。胎土は1～2mm程度の砂粒を含み、焼成は良好で、暗灰白色を呈している。

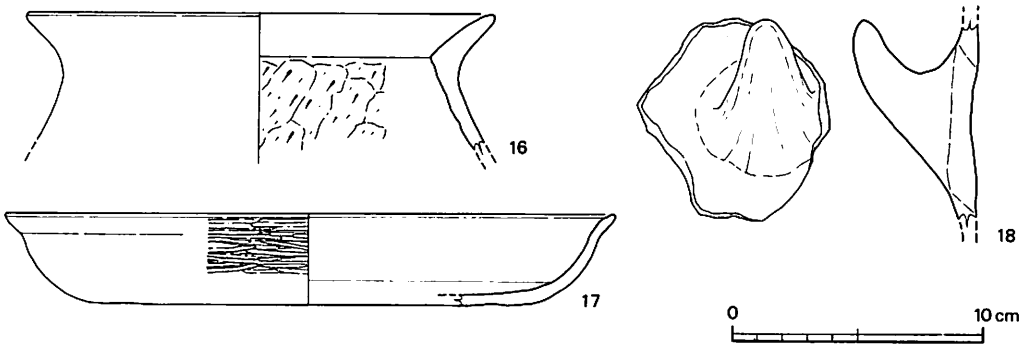
高杯（12）　12は脚部が大きく外反し、脚端部が直下するものである。脚筒部内面はナデ調整、他は回転ナデ調整である。胎土は、砂粒を含み、焼成良好で暗灰白色を呈している。

盤（13）　体部～口縁部が直線的に外上方へ延び、口縁端部は直立気味で、外面を台形に拡張している。体部外面はカキ目、他は回転ナデ調整である。胎土は1～3mm程度の砂粒を含み、焼成は良好で灰白色を呈している。口径30.8cm。

円面硯（14・15）　14は硯面の破片で、陸や海の大半は欠失している。陸の周囲には堤がなく、いわゆる無堤式である。陸は平滑であるが、周縁から中央に向かってわずかに凹んでいる。海は陸より稜をなし、深さ0.6cmである。陸～海は回転ナデ調整、陸内面はヘラ削りである。胎土は2mm前後の砂粒を含み、焼成は良好で、暗青灰色を呈している。15は台



第9図　出土遺物実測図（2）（1：3）
（8303T－SB1：14、8303T－SB2：15）



第10図　出土遺物実測図（3）（1：3）
（8301T－SB1：16・17、8303T－SB2：18）

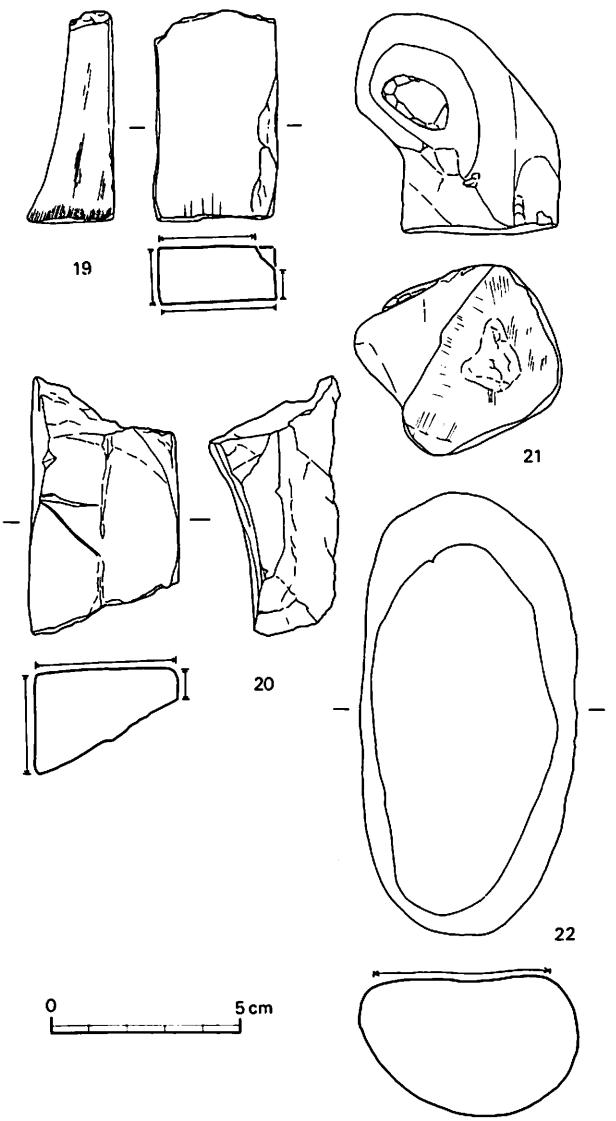
脚部の破片である。台脚部はゆるやかに外反し、下半で更に広がって、脚端部は内傾して終わるが、接地部を下方にやや肥厚させている。脚部中央には、長方形状の透しが約20カ所入っているものと思われ、外側から内側へ穿っている。また、脚部外面下半には3条の沈線が、脚端面にも2条の沈線が入っており、脚部下半の中央の沈線以外は幅広となっている。外面及び透しには、黄緑色の自然釉が付着している。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好、堅緻で、暗灰色を呈している。脚端部径19.4cm。14・15は大きさや胎土その他からみると別個体とおもわれる。

土師器（第10図、図版5）

甕（16）　体部は肩が張らず、頸部はくの字に屈曲し、口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部内面はヘラ削り、口縁部内面はヨコナデ調整、外面は調整不明である。胎土は砂粒を多く含み、焼成は甘く、淡黄白色を呈している。口径18.8cm。

皿（17）　底部は平坦で、体部は内湾気味に立上がり、口縁部は短く外反し、端部は丸く終わり、内面には段が付く。体部外面は横方向のヘラ磨き、口縁部・体部内面はヨコナデ調整、底部外面はナデ調整、内面は調整不明である。胎土は1～2㎜程度の砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈している。口径24.2cm、器高3.7cm。

甑（18）　把手の破片である。角頭状で、断面はやや楕円形である。内外面とも調整不明である。胎土は1～4㎜程度の砂粒を多く含み、焼成は甘く、淡黄褐色を呈している。

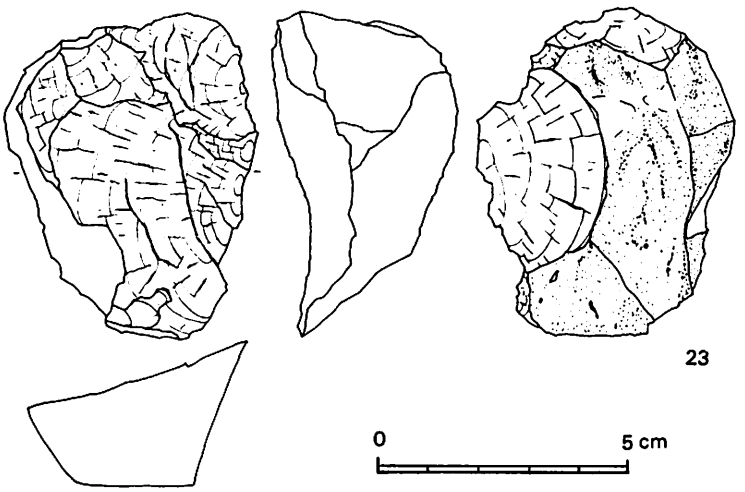


第11図　出土遺物実測図（4）（1：2）
（8301T－SB2：21、8302T：22、8303T－SB2：19・20）

(2)　**石器類**（第11・12図、図版6）

砥石（19・20）　19は現存長6.6cm、最大幅2.3cm、最大厚2.3cm、重さ

55.5g。バチ形を呈するもので上半が欠失している。断面は長方形で，4面を使用しており、擦痕が残っている。淡褐色を呈している。20は現存長6.8cm、最大幅3.9cm、現存厚3.5cm、重さ93.6g。バチ形を呈するもので、上半、下半、側方の3面を欠失している。淡褐色を呈している。



第12図　出土遺物実測図（5）（2：3）
（8315T：23）

磨石（22）　22は最大長11.7cm、最大幅5.8cm、最大厚3.8cm、重さ378.1g。自然礫の石材を素材とし、片面のみ磨耗痕が認められる。縄文時代のものと思われる。

不明石器（21）　21は最大長5.9cm、最大幅4.2cm、最大厚5.0cm、重さ163.0g。1面と下端を磨いており、用途は不明である。

石核（23）　23は最大長6.6cm、最大幅5.1cm、最大厚3.7cm、重さ111.0g。角礫を用いた石核であり、自然面が残る。剝離面を打面とし、数枚の剝片を取ったものである。水晶製。

Ⅵ まとめ

昭和53年度から調査を開始し、本年度で5年次を迎えるが、今までの調査をふりかえってみると、第1・2次発掘調査では郡衙庁院部西側部分及び旧石器の出土した配水池周辺を中心に調査を実施し、庁院部の構造や関連遺構についてと、地質学的調査などによって旧石器の年代等についての解明が行なわれた。これに引き続き、第3・4次発掘調査では庁院部から配水池にかけての丘陵上及び緩斜面や丘陵最頂部を中心に範囲確認のための調査を実施し、郡衙関連遺構が丘陵のかなり広範囲に分布していることや旧石器包含層が丘陵頂部に限られることなどが明らかになった。

第5次発掘調査はこれまでの調査に引続き遺跡の範囲確認を主眼に置き、今まで調査があまり行われていなかった丘陵頂部より派生した支脈の尾根筋に調査区を設けた関係で、かなり広範囲にわたって調査を行うこととなったが、トレンチの密度は低くなる結果となった。調査結果をみると郡衙関連の遺物はすべての調査区から出土し、遺構は、第1・2・5調査区より竪穴式住居跡5・土坑5・溝3等を検出した。また時期は不明であるが、第4調査区より溝1を検出した。郡衙関連遺構は丘陵頂部及びそれより東・西に派生した支脈の平坦部や緩斜面に立地しており、掘立柱建物跡は検出できなかったものの、竪穴式住居跡がかなり濃密に検出できた。

細かくみていくと、第3・4調査区のある丘陵北辺は尾根が細く、かなり急峻で、時期不明の溝1を検出したほかは遺物が小量出土したのみで、遺構・遺物とも希薄な地帯である。第1調査区のある丘陵頂部では以前の調査で配水池周辺より掘立柱建物跡・竪穴式住居跡が、やや南部の進入路より掘立柱建物跡が確認されていたが、この中間地点の8301・8302Tより竪穴式住居跡等を検出し、丘陵頂部の南西半には郡衙関連遺構が濃密に分布しているものと思われる。第2調査区のある丘陵東半の中央は丘陵頂部から尾根が東に派生した後、北東～北へ向きを変えており、先端は造成地や国道375号線によって切られている。8305Tより竪穴式住居跡を検出したが、これより北東方の8214・8215・8225Tにおいても同様な竪穴式住居跡等が、谷を挟んだ南方の8004Tから掘立柱建物跡が確認されているほか、尾根筋で国道375号線に切られた東側断面にも竪穴式住居跡がみられることから、谷を挟んだ尾根上及び斜面を中心に集落が存在していたものと思われる。丘陵西半の第5調査区は丘陵頂部から西方に派生した尾根上にあり、8303Tより竪穴式住居跡等を検出したが、こうした緩斜面は谷を挟んで北と南に広がっており、この地帯から同様な遺構が検出することは十分考えられる。

集落や住居構造についてはトレンチ調査の為、十分把握できていないが、緩斜面に立地したものが多く、松ケ迫遺跡群[1]などと同様なものと思われる。緩斜面に立地した竪穴式住居跡は平面プランがコの字形で、斜面上方を削平し、下方を盛土貼床して平坦面を造出している。造付けのカマドをもつものは斜面上方の辺に造られている。袖部は礫と粘土で形成し、煙道部はほとんど痕跡がなく、独特の煙出しを行ったものと思われる。こうした例は平木池遺跡[2]などにも

みられる。

遺物についてみると竪穴式住居跡などから土器・石器・鉄滓などが出土している。土器は前年度調査と同様なもので、7世紀後半～8世紀代のものと思われる。8303TのＳＢ１・２より各１点ずつ円面硯の破片が出土している。１点は無堤式の硯面の破片で、もう１点は透脚硯の台脚部の破片であり、両者とも大型品である。下本谷遺跡では転用硯は出土しているが、円面硯[(3)]は初例であり、県内でも10数点しか知られておらず、しかも出土が官衙跡・寺跡・窯跡等の推定地に限られる傾向にあるところから、資料的価値が高い。またこれが、8303Tの竪穴式住居跡から出土したことで興味が持たれる。

以上のように丘陵の北半にも郡衙関連遺構が広範囲に分布し、また、まとまりがいくつか認められ、遺物は円面硯をはじめ多くの出土をみた。しかしながら、郡衙の庁院部は確認されたものの、付属施設である官舎・正倉・厨屋などは明確になっておらず、また郡衙と丘陵北半の集落についての関係は解明されておらず、今後、検討が必要であると思われる。

註

(1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』1981年。

(2) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『平木池遺跡発掘調査報告』1982年。

(3) 円面硯の県内出土地地名表

ザブ遺跡（福山市津ノ郷町）１点

樋渡（ひわたし）遺跡（深安郡神辺町）２～３点

御領遺跡（　　〃　　）１点

下岡田遺跡（安芸郡府中町）２点

許山（もとやま）古窯跡（三原市高坂町）２点

上山手廃寺跡（三次市向江田町）１点

大宮遺跡（深安郡神辺町）１点

古江西１号貝塚（広島市西区古江西町）１点

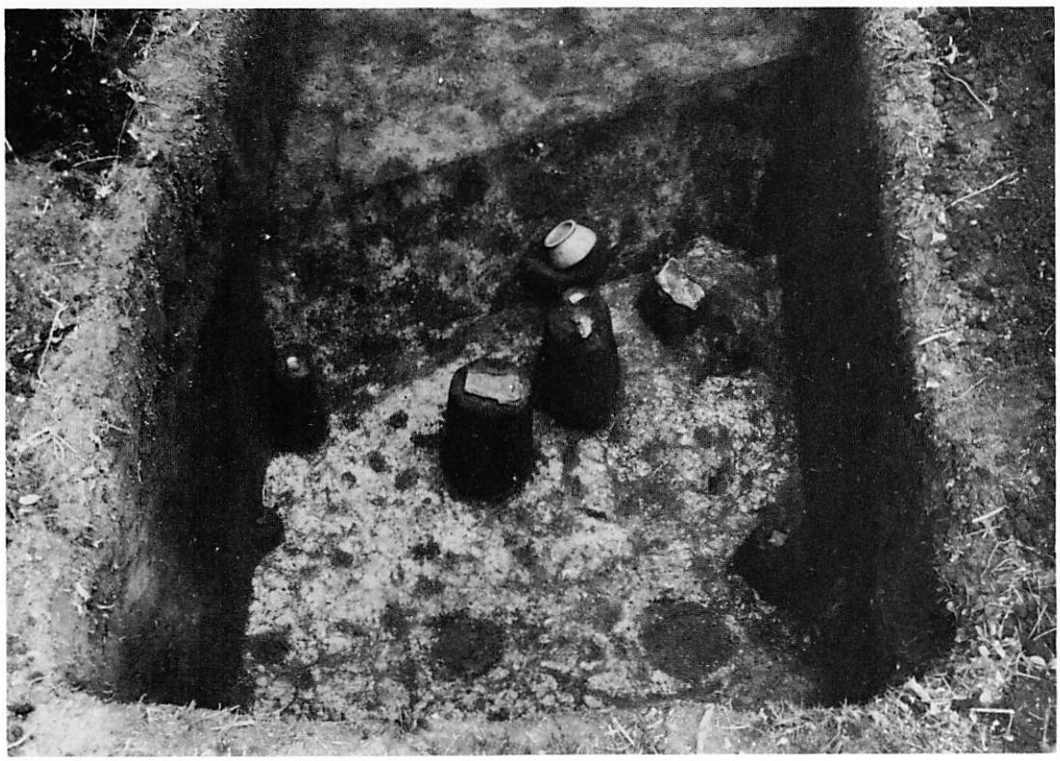
下本谷遺跡（三次市西酒屋町）２点

(推定) 備後国府跡鵜飼地区（府中市鵜飼町）１点

図　　版

a．下本谷遺跡遠景（南西より）

b．8301T－ＳＢ１・２，ＳＫ５（西より）



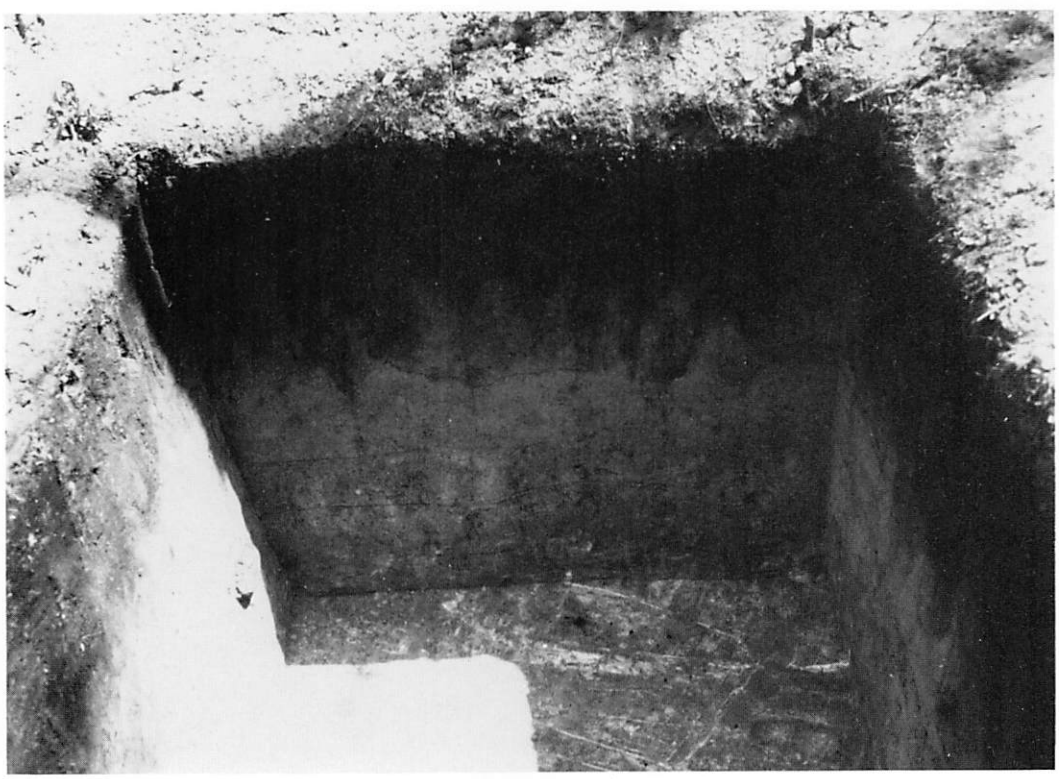
ａ．8303Ｔ－ＳＢ１（西より）

ｂ．8303Ｔ－ＳＢ２（西より）

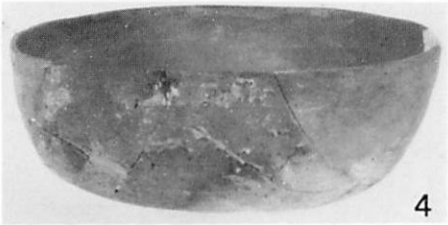
a．8305Ｔ―ＳＢ１（北より）

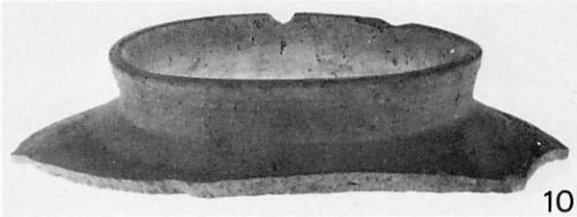
b．8311Ｔ―ＳＤ１（南東より）

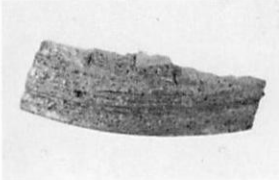
a．8314Ｔ－ＳＤ１（南東より）

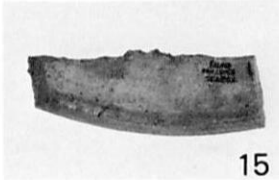


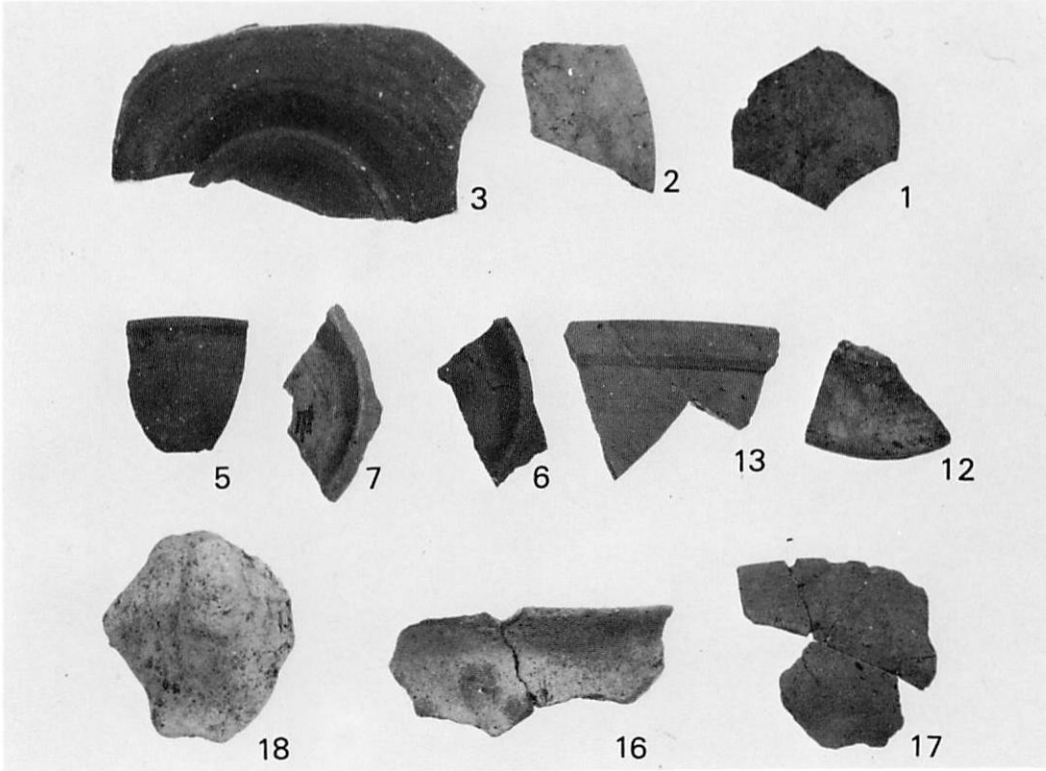
b．8315Ｔ東壁断面（西より）



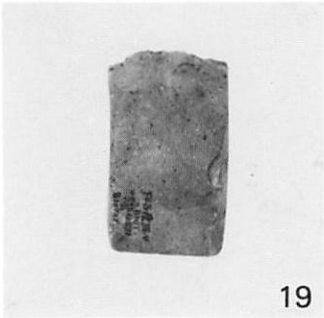


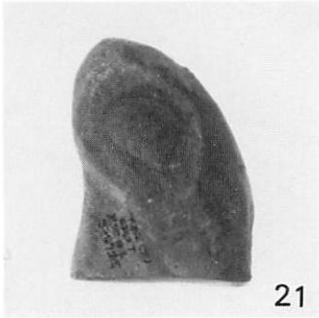


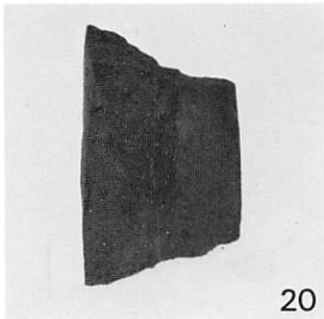




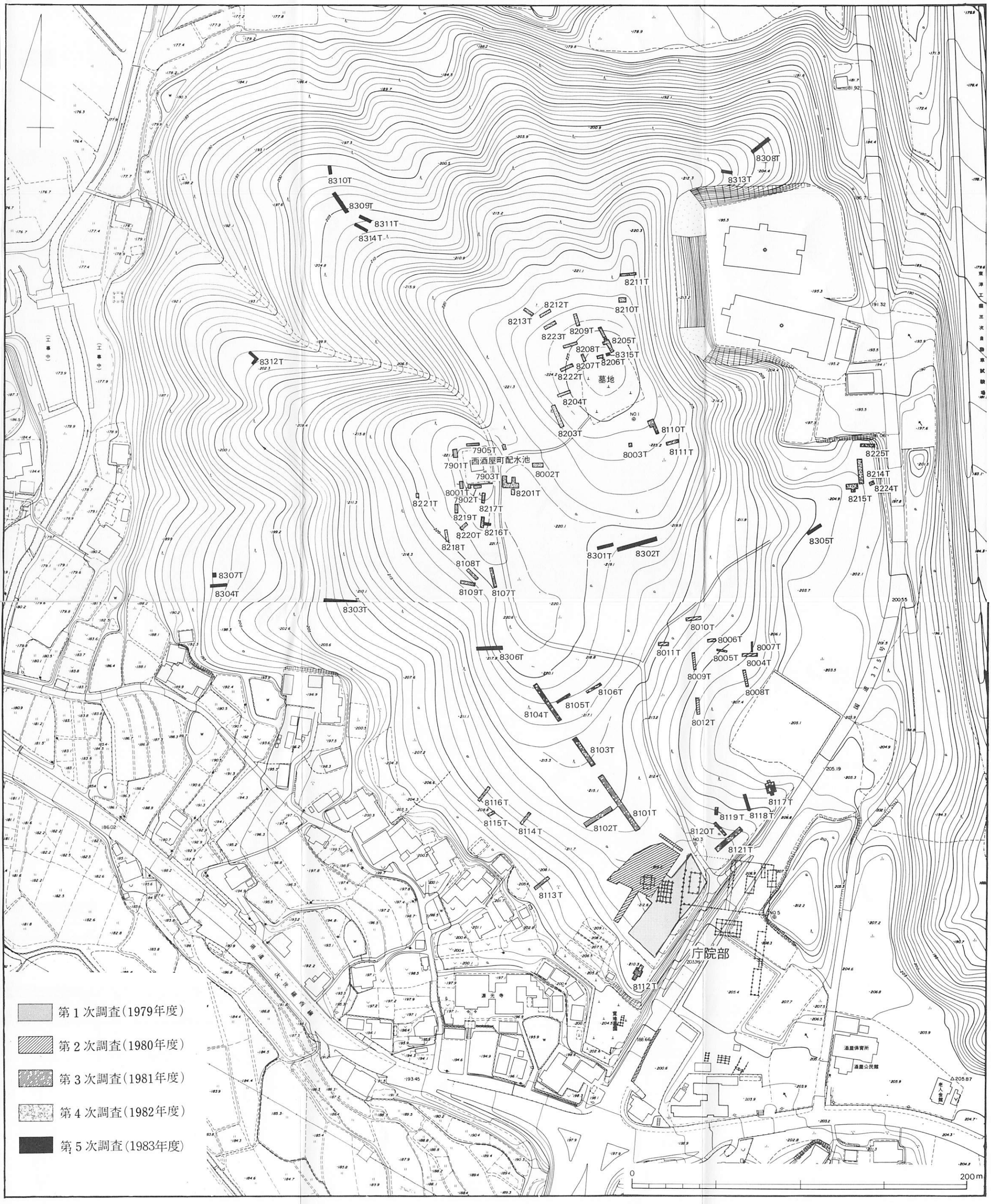
出 土 遺 物 (1)







出　土　遺　物　(2)



付図　下本谷遺跡トレンチ配置図（1：2,000）

下本谷遺跡第５次発掘調査概報

１９８４

昭和59年３月31日発行

編集　広島県立埋蔵文化財センター
広島市西区観音新町４－８－49
電　話（082）２９５－５４５１

発行　広島県教育委員会

印刷　至誠堂印刷株式会社